

25年度 私立大・短大入学状況

私立大「入学定員割れ」、24年度より 32校減の232大学・40.3%に好転！

入学者約 9,000 人(1.9%)増の約 48 万 4,000 人。

入学者の増加率は、地方 3.1%、大都市圏 1.7%！

私立短大の「入学定員割れ」は 197 校・61.0%に好転。

旺文社 教育情報センター 25 年 8 月

25 年度に「入学定員割れ」となった私立大は 24 年度より 32 校減の 232 校で、全私立大(集計校)に占める割合も 5.5 ポイント下降の 40.3%に好転したことが、日本私立学校振興・共済事業団の調べでわかった。私立大の 25 年度入学状況は 24 年度に比べ、18 歳人口・高卒者がともに 3%以上増加した中、入学定員が 0.6%、志願者が 6.0%、受験者が 6.2%、合格者が 2.6%それぞれ増え、入学者も 3 年ぶりに約 9,000 人(1.9%)増えて約 48 万 4,000 人となった。

地域別では、地方の大学(学部所在地別)入学者の増加率が 3.1%で、大都市圏の 1.7%を大きく上回った。学部系統別の志願者動向では、医・歯・薬学系、保健系、理・工学系の増加が目立つ。

短大の「入学定員割れ」校も、24 年度より 33 校減の 197 校・61.0%に好転した。

以下に、同事業団がまとめたデータ等を基に私立大・短大別に入学状況などの概況を探った。

私立大

<私立大全体の基礎データ>

(表 1)

区 分	平成 25 年度	平成 24 年度	増 減
集 計 校 数	576 校	577 校	▼1 校
入 学 定 員 A	458,456 人	455,780 人	2,676 人(0.6%)
志 願 者 B	3,390,171 人	3,198,128 人	192,043 人(6.0%)
志願倍率 B/A	7.39 倍	7.02 倍	0.37 ポイント
受 験 者 C	3,266,528 人	3,074,603 人	191,925 人(6.2%)
合 格 者 D	1,147,250 人	1,117,758 人	29,492 人(2.6%)
合 格 率 D/C	35.12%	36.35%	▼1.23 ポイント
入 学 者 E	484,024 人	474,893 人	9,131 人(1.9%)
歩 留 率 E/D	42.19%	42.49%	▼0.30 ポイント
入学定員充足率 E/A (加重平均)	105.58%	104.19%	1.39 ポイント
入学定員割れ校数(割合)	232 校(40.3%)	264 校(45.8%)	▼32 校(▼5.5 ポイント)

- (注) * 対象は一般選抜、推薦入試、AO入試の他、社会人・帰国子女入試等含む。通信制大学 4 校、募集停止 8 校、株式会社立大学を除く。 * 各データは「学校法人基礎調査」(調査基準日は各年度 5 月 1 日)に基づく。 * ▼印は減少・下降を示す。
* 志願者・受験者・合格者数は、併願含む延べ数。なお、入学者数(実数)には、留学生も含む。
* 「入学定員割れ」校は、全学の入学定員数に対する入学者数の割合が 100%未満の大学。
* 日本私立学校振興・共済事業団資料(25 年 8 月)による。以下の図表等で、出典明記のないものは同事業団データを基に作成。

【25年度 私立大入試の概況】

- 25年度の私立大(集計 576校。以下、同)の入学定員は45万8,456人で、前年度より2,676人(0.6%)増加した。なお、25年度の新設大学は、2校である。

平成元年度からの25年間の入学定員の推移をみると、15年度に若干前年度割れとなったが、毎年度増加して、25年度は元年度の1.56倍(18歳人口は約64%)に達している。

- 私立大の志願者数(一般・推薦・AO入試等含む延べ数。以下、同)をみると、近年では13年度～15年度は増加、16年度～18年度は減少、19年度～23年度は増加、24年度は6年ぶりに減少したが、25年度は再び前年度より19万2,043人(前年度比6.0%)増え、339万171人となった。
- 受験者数(延べ数)も志願者数と同様の傾向を示し、25年度は前年度より19万1,925人(同6.2%)増の326万6,528人であった。
- 25年度の合格者数(延べ数)は、前年度より2万9,492人(同2.6%)増の114万7,250人である。最近の合格者数をみると、20・21年度は入学定員増にもかかわらず、合格者の絞り込みなどで減少したが、22年度から増加に転じている。

合格率は前年度より1.23ポイント下降の35.12%となった。元年度からの合格率は、元年度～4年度が20%未満、5年度～9年度が20%台、10年度以降が30%台で、18・19年度は過去最高の37.06%。20年度以降は34%～36%台で推移している。(以上、表1参照)

<入学定員／志願者数／受験者数／合格者数／入学者数の推移>

私立大の「入学定員／志願者数／受験者数／合格者数／入学者数」(5項目)と18歳人口のそれぞれ元年度～25年度までの推移をみると、次のような点が浮かび上がってくる。

- ① 元年度～4年度：18歳人口増加期(4年度は18歳人口が直近のピークで約204万9,000人) → 当該年度間では、各年度とも前記5項目はいずれも年度を追って増加していった。
- ② 5年度～12年度：18歳人口の急激な減少とともに、志願者・受験者とも毎年度減少。
- ③ 13年度：18歳人口が9年ぶりに増加(12年度～14年度は所謂“下り階段の踊り場”状態) → 前記5項目は合格者数を除き、いずれも12年度より増加した。
- ④ 14年度～21年度：再び18歳人口の減少期に入り、年度によっては志願者・受験者減に留まらず、この8年間で4回、入学者減となった。
- ⑤ 22年度：18歳人口が9年ぶり、高卒者数(中等教育学校後期課程卒業者含む。以下、同)が18年ぶりにそれぞれ増加 → 前記5項目はいずれも21年度より増加した。
- ⑥ 23・24年度：18歳人口・高卒者数とも2年連続減少。23年度は、「入学定員／志願者数／受験者数／合格者数」(4項目)が増加したにもかかわらず、入学者数が減少した。24年度は、志願者数・受験者数が減少に転じたのに加え、入学者数が2年連続減少した。
- ⑦ 25年度：18歳人口・高卒者数がともに3年ぶりに3%以上増加した中で、前記5項目はいずれも増加した。

ただ、「歩留率」(入学者数÷合格者数)が前年度より0.30ポイント下降の42.19%で、元年度以降最低だったことが、注目される。因みに、元年度の歩留率は56.89%であった。

＜「一般入試」の志願者動向＞

旺文社集計データ等にもみる 25 年度私立大「一般入試」における志願者動向の大まかな特徴としては、次のような点が挙げられる。

- ◆ センター試験の 3 年ぶりの平均点大幅ダウン(難化)が“追い風”となって、各地域の私立拠点大学を中心に志願者が増えた。特に、“安全志向・地元志向”から、首都圏では他地域からの流入が鈍り、難関～準難関大の多くが「一般入試」の志願者増加率の全国平均(25 年 6 月中旬時点での旺文社集計で約 7%増)を下回った。

また、センター試験の難化によって、国公立大受験者は、私立大のセンター試験利用入試を敬遠し、私立大独自入試の併願を増やしたとみられる。

- ◆ 「一般入試」志願者の学部系統別の動きをみると、例年と同様、医、歯、薬、医療・看護系や理・工学系など、“資格・実学志向”、“理系志向”を反映した志願者増が目立った。

【大学進学率の低下】

- 25 年度の私立大への進学状況は好転したが、国公立大も含めた大学(学部。以下、同)への進学状況は厳しい結果だったといえよう。(文科省『25 年度学校基本調査速報』)

25 年度の 18 歳人口と高卒者数は前年度比 3%以上増加し、大学受験生数・入学者数とも 2%程度増加した。しかし、大学入試の「現役志願率」は前年度より 0.1 ポイント下降の 54.9%で、「現役進学率」も 0.3 ポイント下降の 47.4%である。特に 18 歳人口の「大学進学率」は前年度より 0.9 ポイント下降の 49.9%で、5 年ぶりに“50%割れ”となっている。

- 25 年度は、大学進学率が下降した一方で、専門学校への「現役進学率」が前年度より 0.2 ポイント上昇の 17.0%で 4 年連続上昇している。

【受験人口の減少と受験生の獲得】

- 25 年度は一時的に 18 歳人口や高卒者数が増えたものの、26 年度は再び減少し、18 歳人口は今年度よりも約 5 万人(約 4%)減の約 118 万人となり、来年度以降、平成 32 年度頃まで 120 万人～117 万人台で推移するとみられる。

こうした、受験人口の減少と不透明な経済状況の下では、私立大は如何にして志願者増を図り、受験生を獲得するかに腐心している。最近では、限界ともいえる入試方法の多様化に加え、奨学金事業の拡充や授業料減免など、経済的支援も活発化している。

- 私立大は今後、こうした“入り口”での学生獲得策に留めず、自校の建学の精神や機能的分化を踏まえつつ、教育研究及び学生の質保証に向けた教育情報や入試情報を受験生にわかりやすく発信し、真に求める学生を獲得していくことが大事だ。

【入学定員充足率】

- 25 年度の入学定員充足率は前年度より 1.39 ポイント上回り、105.58%だった。

入学定員充足率 100%未満(入学定員割れ)の大学は、24 年度より 32 校減の 232 校で、集計校数の 40.3%(前年度は 45.8%)に好転した。なお、入学者が定員の 50%に満たない大学も、24 年度の 18 校から 17 校(全体の 3.0%)に減った。(表 1、図 1・図 2・図 3 参照)

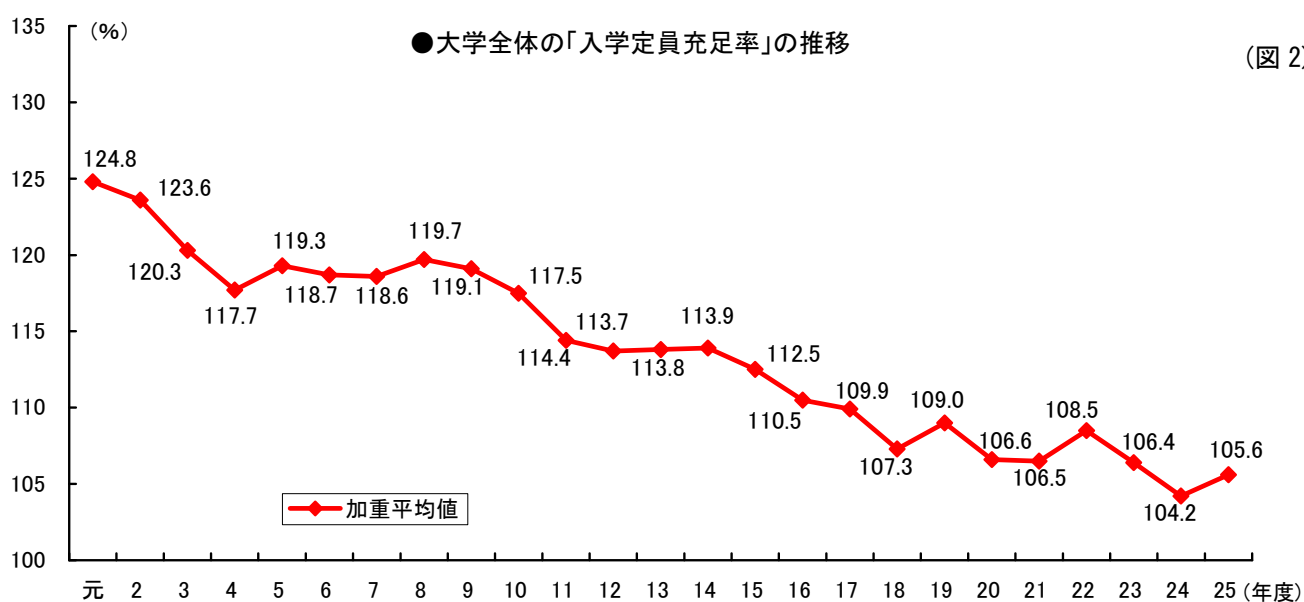
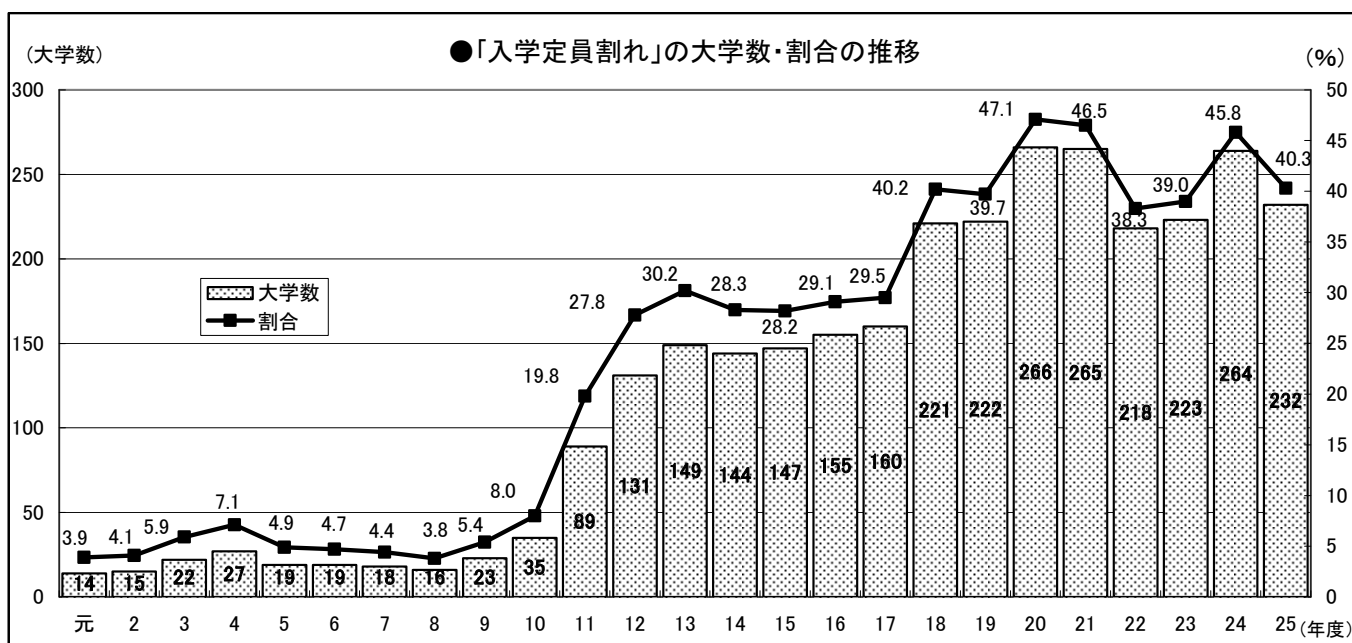
- 入学定員充足率の推移をみると、平成元年度～3 年度まで 120%台、4 年度～16 年度ま

で 110% 台、17 年度から 110% 台を切り、24 年度の過去最低(104.19%)の後、25 年度は上昇に転じている。(図 2 参照)

- 25 年度の入学定員充足率の分布(充足率の 10% ごとの区分における大学数の集計校数に対する割合)を前年度と比べてみよう。“入学定員を充たしている充足率 100% 以上”の区域では、110% 台で前年度より 10 校(割合で 1.7 ポイント)下回っている以外、各区分で前年度を上回っている。また、100% 台の大学が 143 校(全体の 24.8%)で一番多く、「入学定員超過」の管理が進んでいることを伺わせる。

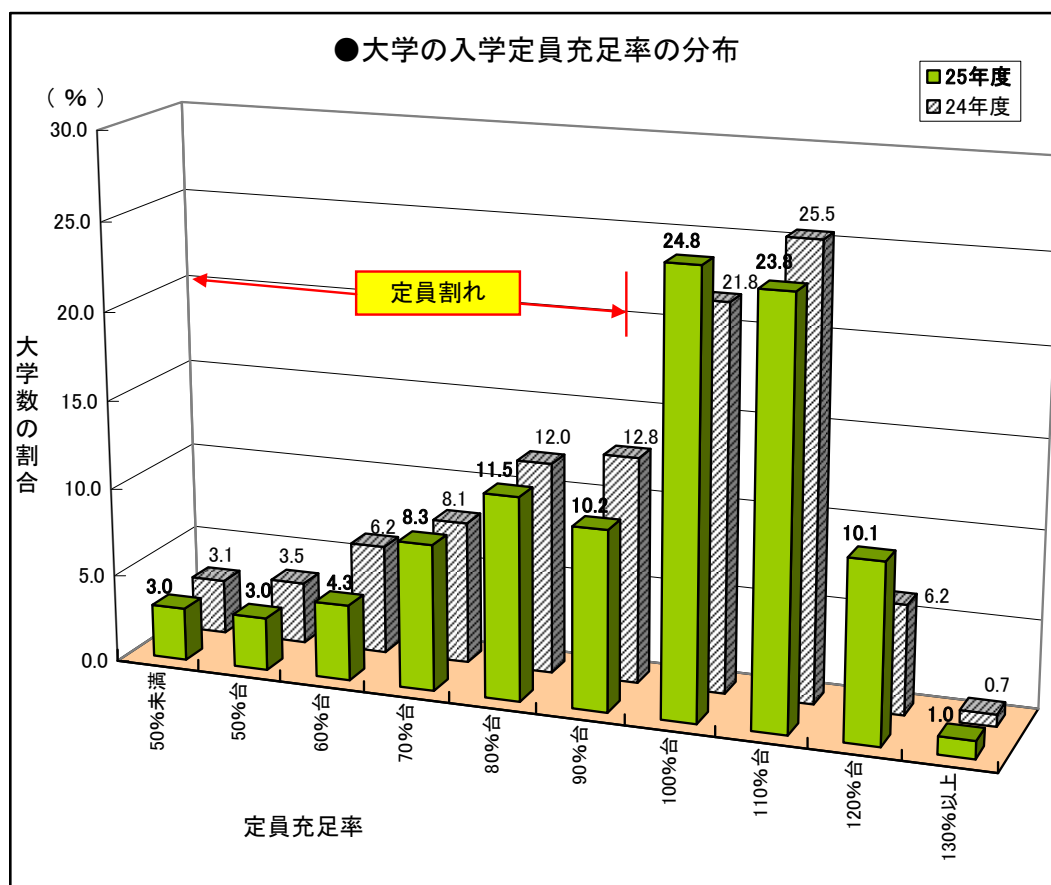
一方、“入学定員割れ状態にある充足率 100% 未満”の区域では、70% 台で前年度を 1 校(割合で 0.2 ポイント)上回っている以外、他の区域はすべて下回っている。(図 3 参照)

(図 1)



(図 2)

(図 3)



【地域別の動向】

家計負担の軽減、進学コストの削減などによる、“地元志向”（通学圏志向）の一層の高まりで、「地方」の大学(学部所在地別)の入学者の増加率が全国平均を大きく上回った。

しかし、その一方で「大都市圏」と「地方」の入学者占有率の格差が目立つ。

(1) 入学者数の変動

25年度の入学者数は全体で9,131人(前年度比1.9%。以下、同)増で、近畿と兵庫の地域以外、すべての地域で増加した。

全国21地域(各地域の当該県等は表2<6ページ>の下段参照。以下、同)の各入学者数(集計は学部所在地ごと)をみると、「地方」(10地域：表2参照)では東北の12.4%増、北陸の10.8%増の大幅増のほか、四国(5.3%増)、東海(4.4%増)、甲信越(3.4%増)など、軒並み全国平均を上回る増加である。

一方、「大都市圏」(11地域)では、福岡5.3%増のほかは、増加率3%~2%台、もしくは前年並みに留まっている。

この結果、入学者数は、「地方」が前年度より2,491人(3.1%)増の8万2,472人、「大都市圏」が前年度より6,640人(1.7%)増の40万1,552人となっている。

「大都市圏」の入学者数は、全入学者の83.0%を占めている。(表2参照)

●地域別「入学状況」の動向(24年度 → 25年度) : 大都市圏 VS. 地方

(表 2)

① 大都市圏(11地域)の動向

地域	24年度			25年度			入学定員 増減(人)	入学者 増減(人)	入学定員 増減率(%)	入学者増 減率(%)	充足率 アップ・ダウン (ポイント)
	入学定員(人)	入学者(人)	充足率(%)	入学定員(人)	入学者(人)	充足率(%)					
宮城	7,860	8,052	102.4%	7,875	8,328	105.8%	15	276	0.2%	3.4%	3.3
埼玉	21,562	23,142	107.3%	21,673	24,000	110.7%	111	858	0.5%	3.7%	3.4
千葉	21,317	21,552	101.1%	21,503	21,715	101.0%	186	163	0.9%	0.8%	-0.1
東京	136,313	150,997	110.8%	138,053	152,036	110.1%	1,740	1,039	1.3%	0.7%	-0.6
神奈川	32,632	35,486	108.7%	32,919	35,664	108.3%	287	178	0.9%	0.5%	-0.4
愛知	33,379	34,878	104.5%	33,759	36,185	107.2%	380	1,307	1.1%	3.7%	2.7
京都	27,087	28,242	104.3%	27,263	28,968	106.3%	176	726	0.6%	2.6%	2.0
大阪	40,582	42,129	103.8%	40,564	43,025	106.1%	-18	896	0.0%	2.1%	2.3
兵庫	22,011	22,446	102.0%	21,911	22,287	101.7%	-100	-159	-0.5%	-0.7%	-0.3
広島	9,304	8,776	94.3%	9,334	9,114	97.6%	30	338	0.3%	3.9%	3.3
福岡	19,068	19,212	100.8%	19,089	20,230	106.0%	21	1,018	0.1%	5.3%	5.2
合計	371,115	394,912	106.4%	373,943	401,552	107.4%	2,828	6,640	0.8%	1.7%	1.0

② 地方(10地域)の動向

地域	24年度			25年度			入学定員 増減(人)	入学者 増減(人)	入学定員 増減率(%)	入学者増 減率(%)	充足率 アップ・ダウン (ポイント)
	入学定員(人)	入学者(人)	充足率(%)	入学定員(人)	入学者(人)	充足率(%)					
北海道	11,823	11,363	96.1%	11,893	11,469	96.4%	70	106	0.6%	0.9%	0.3
東北	6,516	5,261	80.7%	6,472	5,914	91.4%	-44	653	-0.7%	12.4%	10.6
関東	10,406	10,453	100.5%	10,688	10,477	98.0%	282	24	2.7%	0.2%	-2.4
甲信越	5,450	5,132	94.2%	5,515	5,308	96.2%	65	176	1.2%	3.4%	2.1
北陸	4,656	4,678	100.5%	4,666	5,182	111.1%	10	504	0.2%	10.8%	10.6
東海	9,668	9,314	96.3%	9,768	9,724	99.5%	100	410	1.0%	4.4%	3.2
近畿	10,765	10,892	101.2%	10,735	10,695	99.6%	-30	-197	-0.3%	-1.8%	-1.6
中国	7,931	7,345	92.6%	7,851	7,526	95.9%	-80	181	-1.0%	2.5%	3.2
四国	4,065	3,507	86.3%	4,060	3,692	90.9%	-5	185	-0.1%	5.3%	4.7
九州	13,385	12,036	89.9%	12,865	12,485	97.0%	-520	449	-3.9%	3.7%	7.1
合計	84,665	79,981	94.5%	84,513	82,472	97.6%	-152	2,491	-0.2%	3.1%	3.1

注) 1. 全国を「21地域」に区分。集計は、「学部所在地」ごと。
 2. 上表①、②とも、右欄の「増減」等は、25年度の24年度に対する数値。
 3. 地方地域の「東北」は宮城、「関東」は埼玉・千葉・東京・神奈川、「東海」は愛知、「近畿」は京都・大阪・兵庫、「中国」は広島、「九州」は福岡をそれぞれ除く。

★21 地域の区分：

1. 北海道＝北海道／2. 東北＝青森・岩手・秋田・山形・福島／3. 宮城＝宮城／4. 関東＝茨城・栃木・群馬／
5. 埼玉＝埼玉／6. 千葉＝千葉／7. 東京＝東京／8. 神奈川＝神奈川／9. 甲信越＝新潟・山梨・長野／10. 北陸＝
- 富山・石川・福井／11. 東海＝岐阜・静岡・三重／12. 愛知＝愛知／13. 近畿＝滋賀・奈良・和歌山／14. 京都＝
- 京都／15. 大阪＝大阪／16. 兵庫＝兵庫／17. 中国＝鳥取・島根・岡山・山口／18. 広島＝広島／19. 四国＝徳
- 島・香川・愛媛・高知／20. 九州＝佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄／21. 福岡＝福岡

(2) 入学定員充足率

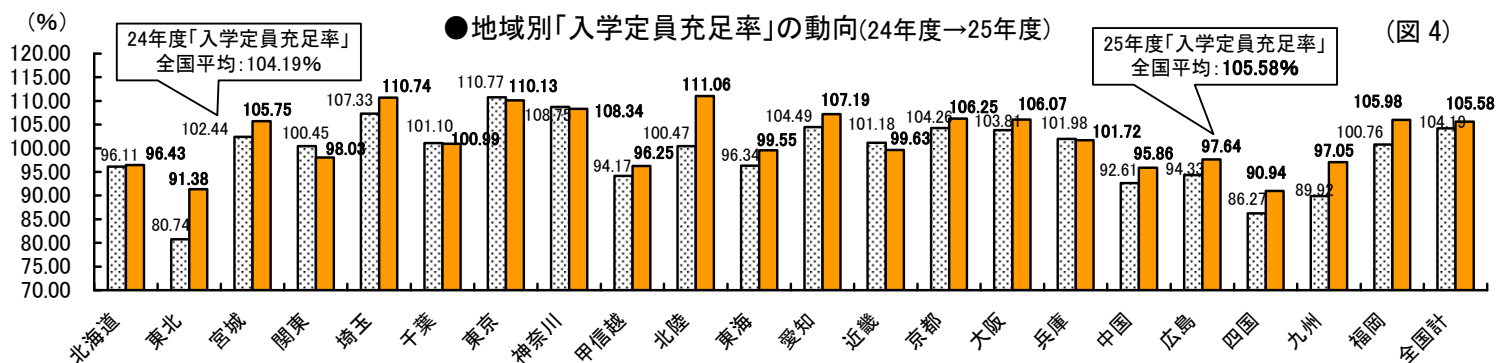
全国 21 地域における入学定員充足率(集計は学部所在地ごと)をみると、「大都市圏」(11 地域)では前年度同様、広島(充足率 97.64%)以外、すべて入学定員を充たしており、「大都市圏」全体の入学定員充足率は前年度より 0.97 ポイント上昇の 107.38%である。

一方、「地方」(10 地域)では、北陸(同 111.06%)以外は“未充足”地域であるが、東北や北陸で 10 ポイント以上の高い上昇率を示し、「地方」全体では前年度より 3.12 ポイント上昇の 97.58%となっている。

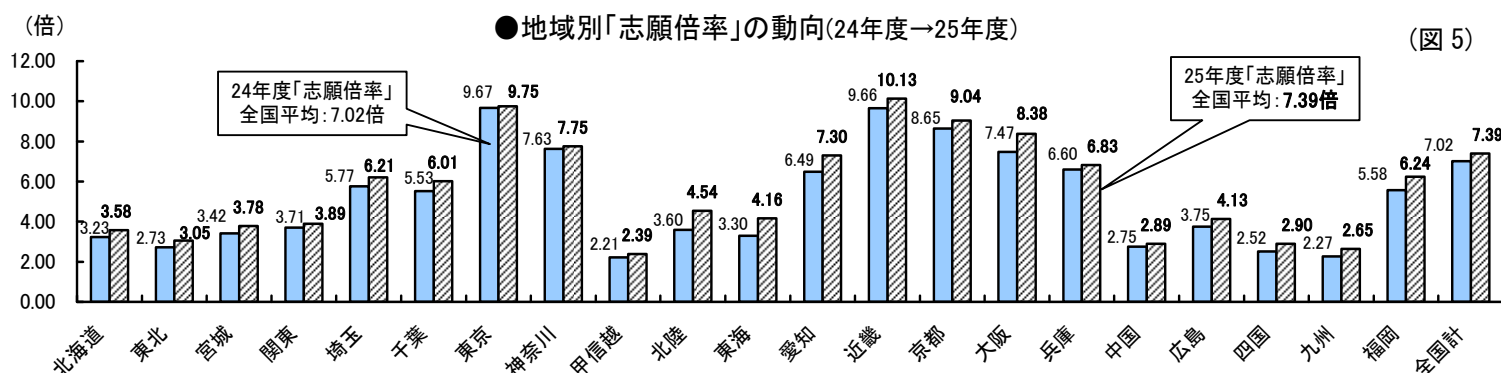
なお、前年度は入学定員を充たしていた関東(同 100.45% → 98.03%)と近畿(同 101.18% → 99.63%)は、それぞれ“未充足”地域になっている。(表 2・図 4 参照)

(3) 志願倍率

全国 21 地域の志願倍率(学部所在地ごとに集計。一般・推薦・AO入試など全ての選抜。以下、同)で、全国平均の 7.39 倍以上は、24 年度と同様、近畿(10.13 倍)、東京(9.75 倍)、京都(9.04 倍)、大阪(8.38 倍)、神奈川(7.75 倍)の 5 地域である。(図 5 参照)



注. ① 全国を「21地域」に区分。各地域区分の当該県等は6ページの「21地域の区分」を参照。② 集計は、学部所在地ごと。③ 25年度の「入学定員充足率」は太字で表示。



注. ① 全国を「21地域」に区分。各地域区分の当該県等は6ページの「21地域の区分」を参照。② 集計は、学部所在地ごと。③ 25年度の「志願倍率」は太字で表示。

◆ 東北地方は、大震災から回復の兆し

東北地方は 23 年 3 月 11 日の東日本大震災や原発事故の影響で、24 年度は志願者数や入学者数の大幅減など厳しい状況であったが、25 年度は回復の兆しが伺える。

24 年度の東北 6 県(青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島)の私立大入学者数は、23 年度より 1,369 人(9.3%)減の 1 万 3,313 人で、全国平均の減少率 1.5%減を大きく上回った。

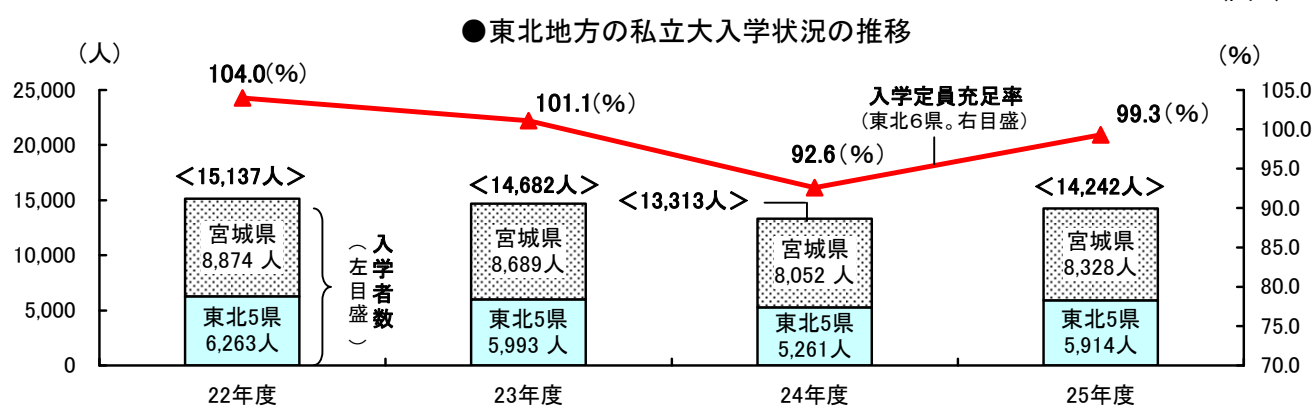
このうち、宮城県を除く東北 5 県の入学者数は、前年度より 732 人(12.2%)減の 5,261 人であった。

大震災から 2 年後の 25 年度は、宮城県を除く東北 5 県の入学定員は前年度よりやや減少の 6,472 人で、入学者数は前年度より 653 人(12.4%)増の 5,914 人。この結果、入学定員充足率は前年度より 10.7 ポイント上昇の 91.4%となり、2 年ぶりに 90%台を回復した。

他方、宮城県の入学者数も前年度の 637 人(7.3%)減から増加に転じ、25 年度は前年度より 276 人(3.4%)増の 8,328 人になった。

これらの結果、25 年度の東北 6 県の入学者数は前年度より 929 人(7.0%)増の 1 万 4,242 人となり、入学定員充足率も 6.7 ポイント上昇の 99.3%まで回復した。(図 6 参照)

(図 6)



注. 1. 棒グラフに付した< >内の数値(太字)は、東北5県(青森/岩手/秋田/山形/福島)と宮城県の東北地方の私立大(学部所在地)入学者数。
 2. 折れ線グラフの数値(太字)は、東北6県全体の「入学定員充足率」を示す。各年度の①東北5県と②宮城県の「入学定員充足率」は次のとおり。
 ・22年度=①92.9%、②113.6%・23年度=①90.0%、②110.5%・24年度=①80.7%、②102.4%・25年度=①91.4%、②105.8%

【大学規模別の動向】

- 大学の規模別の動向をみると、過去数年間、入学定員充足率(以下、充足率)及び志願倍率とも、“入学定員(以下、定員)800人”が大きな分岐点となっていた。つまり、“定員800人未満”の中小規模大学では、“定員割れ・低倍率”状態であった。

しかし、22年度に「地方」の中小規模大学を中心に入学定員充足率の改善がみられ、それまで定員割れの分岐点となっていた規模別区分「定員600人以上800人未満」の大学が16年度以来、6年ぶりに“脱・定員割れ”を果たした。つまり、22年度は入学定員規模がそれまでより1ランク小規模の“定員600人未満”の大学が定員割れ状態になった。

この状況は、23年度に4年ぶりの“脱・定員割れ”を果たした規模別区分「定員100人未満」の大学を除き、23年度にも受け継がれた。

24年度は、小中規模大学で前年度、定員を充たしていた「定員100人未満」と「定員600人以上800人未満」の2区分で、いずれも充足率が90%台に低下した。このため、“定員800人未満”の小中規模大学では再び定員割れ状態に陥った。

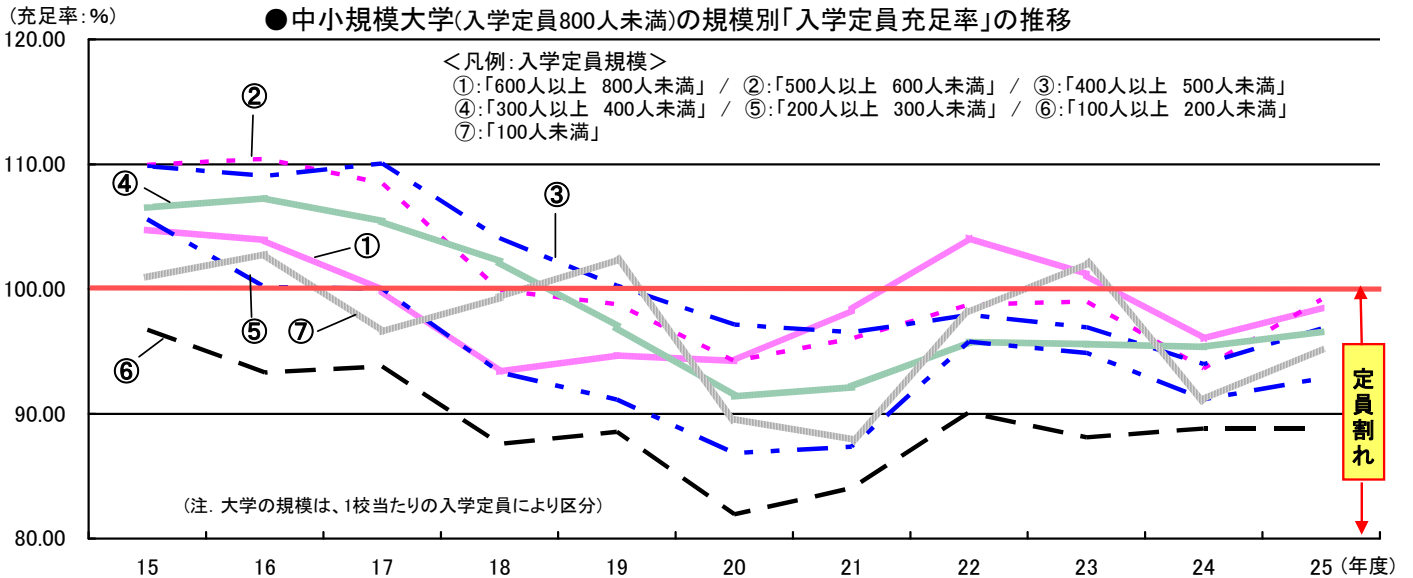
- 25年度も前年度とほぼ同様の状況を示し、“定員800人未満”の小中規模大学では定員割れ状態になっている。

ただ、規模別に前年度との充足率の変化をみると、区分「定員3,000人以上」の大規模大学では前年度より充足率がやや低下(109.62% → 108.78%)しているが、他の区分ではすべて上昇している。特に、「定員500人以上600人未満」の5.53ポイント上昇(25年度充足率99.17%)や「定員100人未満」(同、95.20%)の4.08ポイント上昇、「定員1,000人以上1,500人未満」(同、110.10%)の3.21ポイント上昇などの改善が目立つ。

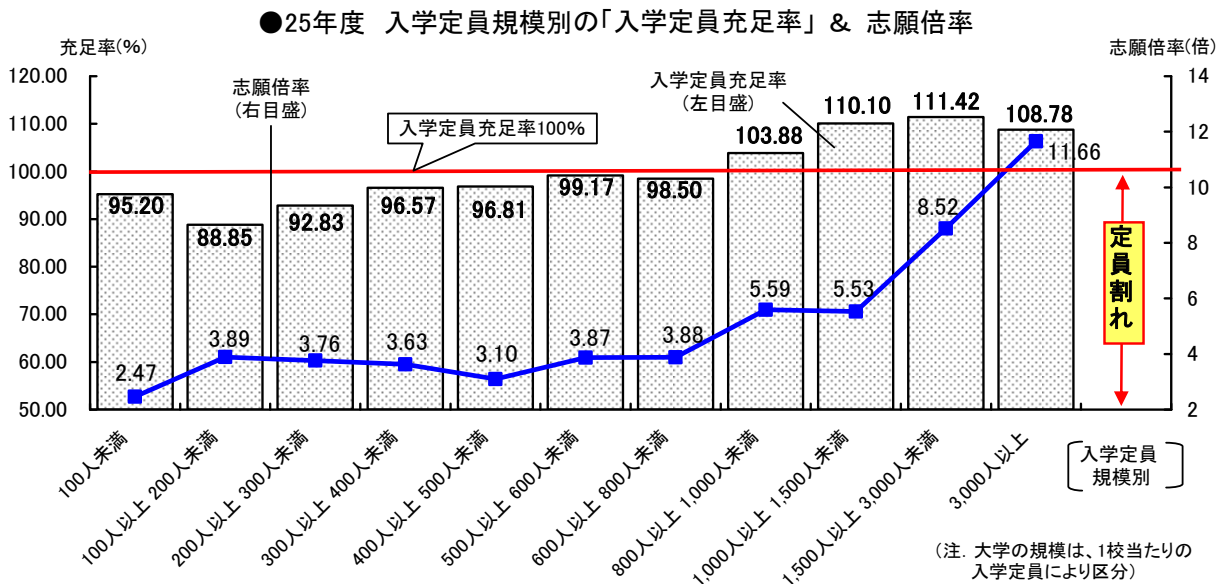
- 他方、志願倍率は依然として、“定員800人未満”は2倍台～3倍台と低い、区分「定員3,000人以上」では11.66倍と高倍率である。(以上、図7・図8参照)

なお、「入学定員3,000人以上」の大規模大学23校(全校数の4.0%)の入学定員は13万1,962人で全定員の28.8%、志願者数は153万9,215人で全志願者の45.4%を占め、大規模大学の“寡占化”が伺える。

(図 7)



(図 8)



【学部系統別の動向】

- 日本私立学校振興・共済事業団(以下、私学事業団)による学部系統別(10ページの注記参照)の動向をみると、志願倍率の最高は例年どおり医学の26.65倍で、以下、農学系(11.16倍)、理・工学系(10.25倍)、薬学(9.05倍)などが続く。

医学部は地域医療の拡充や研究医養成などのため、20年度から国公立大を通じて定員増が図られてきた。25年度の私立大では入学定員(一部、看護系含む)108人(3.0%)増に対し、志願者数が1万2,622人(14.9%)増えたため、志願倍率は2.75ポイント上昇した。

- 学部系統別の志願者数の動向をみると、全志願者数が増加(前年度比6.0%増)した中、薬学(同26.3%増)、家政学(同15.2%増)、医学(同14.9%増)、歯学(同14.9%増)、保健系(同13.8%増)などの増加が目立つ。志願者数の多い社会科学系(25年度志願者数=約115万7,400人)は2.1%増に留まり、理・工学系(同、約60万7,000人)は9.7%増であった。

- 一方、志願者減となった主な学部は、情報理工学部(同 28.4%減)、国際関係学部(同 12.6%減)、総合政策学部(同 5.3%減)、経済学部(同 2.3%減)、文学部(同 1.2%減)などである。

なお、法学部の志願者数は24年度の約21万9,500人(23年度比8.0%減)から、25年度は約23万1,900人(24年度比5.6%増)に増加している。

注. ★私学事業团による13の学部系統区分：
 ①医学／②歯学／③薬学／④保健系／⑤理・工学系／⑥農学系／⑦人文科学系
 ／⑧社会科学系／⑨家政学／⑩教育学／⑪体育学／⑫芸術系／⑬その他

【定員割れの推移】

- 入学定員割れの大学数・割合の推移をみると、11年度～13年度に急増して30%を超えた後、17年度までは30%弱で横ばい状態であった。18年度は221校、19年度は222校が入学定員割れとなり、その割合は一気に40%程度に達した。さらに、20・21年度は半数近くの大学が定員割れとなったが、22年度は「地方」の大学や中小規模大学の復調などから、30%台後半まで改善された。23年度は校数・割合とも再び増加。24年度はさらに悪化して、20・21年度の46%～47%台の状態に近づいた。

25年度は前述したように、18歳人口・高卒者数の増加やセンター試験の難化による“追い風”、「地方」の拠点大学の様々な改革・改善方策と受験生の“地元志向”などが相俟って、入学定員割れや入学定員充足率は好転した。(図1参照)

- ところで、入学定員割れの大学数・割合が11年度から急激に増加しているのに、全体の充足率(加重平均値)がさほど大きな変化を示していないのは、大規模大学・学部による安定した数値によるとみられる(図1・図2参照)。

図2は加重平均値で示してあるが、加重平均値には大規模な学部・学科の影響が、図1の単純平均値には小規模な学部・学科の影響が現れやすい。なお、図2の加重平均値による入学定員充足率は、大規模大学の定員管理の強化などで、下降傾向を示している。

【定員割れからの“脱出”状況】

- 私学事業团では、各大学の25年度入学定員充足率を、前年度と比較している。10%ごとに「区分」した各大学の充足率の動向をみてみよう。

24年度に定員割れであった261校のうち、25年度に充足率を上昇させて入学定員を充足(定員割れから“脱出”)した大学は50校(24年度定員割れ261校に対する割合：19.2%)で、24年度の“脱出組”16校・7.2%(23年度定員割れ222校に対する割合)に比べ、大幅に増加(好転)した。残り211校(261校に対する割合：80.8%)のうち、例えば、76校(261校に対する割合：29.1%)では充足率の上昇があったものの脱出にいたらず、2年間とも定員割れ状態になっている。

- 一方、24度は入学定員を充たしていた313校のうち、25年度に充足率を低下させて“定員割れ”に陥った大学は20校(313校に対する割合：6.4%)あり、校数・割合とも前年度(24年度は55校・15.8%)より大幅に減少(好転)した。

私立短大

<私立短大全体の基礎データ>

(表 3)

区 分	平成 25 年度	平成 24 年度	増 減
集 計 校 数	323 校	330 校	▼7 校
入 学 定 員 A	66,504 人	68,899 人	▼2,395 人(▼3.5%)
志 願 者 B	98,066 人	96,664 人	1,402 人(1.5%)
志願倍率 B/A	1.47 倍	1.40 倍	0.07 ポイント
受 験 者 C	95,998 人	94,681 人	1,317 人(1.4%)
合 格 者 D	75,065 人	74,918 人	147 人(0.2%)
合 格 率 D/C	78.19%	79.13%	▼0.94 ポイント
入 学 者 E	61,284 人	60,678 人	606 人(1.0%)
歩 留 率 E/D	81.64%	80.99%	0.65 ポイント
入学定員充足率 E/A (加重平均)	92.15%	88.07%	4.08 ポイント
入学定員割れ校数(割合)	197 校(61.0%)	230 校(69.7%)	▼33 校(▼8.7 ポイント)

- (注) *対象は一般選抜、推薦入試、AO入試の他、社会人・帰国子女入試等含む。通信制短大1校、募集停止19校を除く。
 *調査基準日は、各年度5月1日。
 *志願者・受験者・合格者数は、併願含む延べ数。
 *▼印は減少・下降を示す。
 *「入学定員割れ」校は、全学の入学定員数に対する入学者数の割合が100%未満の短大。
 *日本私立学校振興・共済事業団資料(25年8月)による。

【入学定員、志願者数、入学定員充足率、学科系統別動向等】

- 私立短大の校数(私学事業団集計)は、5年度の494校をピークに9年度の2校増を除き、毎年度減少し、25年度は前年度より7校減の323校である。
 入学定員も4年度の18万8,105人をピークに年々減少し、25年度は前年度より2,395人(3.5%)減の6万6,504人である。
- 元年度以降の志願者数・受験者数の推移をみると、ともに5年度以降は16年度(志願者数1.0%増、受験者数1.3%増)と22年度(志願者数0.9%増、受験者数1.0%増)の増加を除き、24年度まで毎年度減少。25年度は志願者数・受験者数とも3年ぶりに増加した。
- 入学定員充足率は11年度の100%割れ以降、16年度を除き、“入学定員割れ”状態が続いている。22年度は90%台に回復したが、23・24年度ともそれぞれ1ポイント以上下降して80%台に低迷。25年度は、3年ぶりに90%台に戻った。(以上、表3参照)
- 学科系統別の動向をみると、各系統とも入学定員充足率の上昇がみられる。入学定員を充たしているのは前年度と同じ保健系(充足率103.40%)のほか、教育系が前年度の入学定員割れ(同99.11%)から脱し、定員を充たしている(同101.69%)。
 入学者数は、農工系(前年度比2.7%増)、教育系(同2.4%増)、家政系(同1.1%増)が増加。
 なお、保健系は入学定員・志願者数・受験者数・合格者数・入学者数とも減少した。